

現代英語の変異性

ー tok・Pisin、Jamaican・Creole および グラスゴー方言の音韻とつづり字の比較ー (1)

杉本豊久

0. はじめに

現代英語の多様性の一側面として、現在世界各地で使われている様々な英語の音韻とつづり字の表記法に焦点を合わせ、お互いを比較し、その独自性と共通性及び普遍性を考察する。具体的には、世界の英語系ピジン・クレオールの代表的存在である二つの変種、即ちオセアニア地区の代表としてパプア・ニューギニアの tok・Pisin (Tok Pisin) および西インド諸島の代表としてジャマイカン・クレオール (Jamaican Creole) のそれぞれの音韻とつづり字法を取り上げ、その相違点と共通性を分析する。さらに、英語の方言の中でその発音とつづり字法において異彩を放つスコットランドのグラスゴー方言の音韻とつづり字法を取り上げ、前述の二つの英語系接触言語との比較を試み、その相違点及び共通点を検討し、異なる英語の変種間に見られる独自性と普遍性の一端を明らかにする。なお、本稿では三異種の比較が主眼であることから、異種間に共通あるいは関連性のある特徴を中心に記述したものである。また、枚数に制限があるために本稿を二つに分け、後半は次号に掲載することとする。

1. tok・Pisin (Tok Pisin) ⁽¹⁾

tok・Pisin (Tok Pisin) とは、パプア・ニューギニアの中で最も広範に話されている Melanesian Pidgin English であり、「ニュー・ギニア・ピジン (New Guinea Pidgin)」とか「ネオ・メラネシアン (Neo-Melanesian)」などとも呼ばれている。こ

の国には750種類にも及ぶ現地語が話されているのだが、tok・Pisinはこれらの地域一帯の「共通語 (lingua franca)」として (つまり、Pijinとして) 広く使われていると共に、約12万人にとっての母語として (つまり、クレオールとして) も使われている。

この国の正式名は「パプア・ニューギニア独立国 (Independent State of Papua New Guinea)」である。そして、その国土面積はおよそ46.2万平方キロメートルあり、日本の約1.25倍に相当する⁽²⁾。具体的には、「ニュー・ギニア島 (New Guinea)」の右半分と「ビスマルク諸島 (Bismarck Archipelago) : ニューギニアの北東域にある大小200余りの島からなる群島で、「ニュー・ブリテン島 (New Britain)」と「ニュー・アイルランド島 (New Ireland)」などを含み、中心地はNew Britain島の「ラバウル (Rabaul)」」、そして「ソロモン群島 (the Solomon Islands)」の北端にある「ブーゲンビル (Bougainville)」などから成る。2006年の太平洋共同体事務局の資料によれば、人口はおよそ618.7万人である。ニュー・ギニア本島は熱帯域にあるが、世界で二番目に大きな島であり、その気候は高地地方と低地地方とで大きく異なる。島を東西に走る山脈には5,000メートルにも達するMt. Jayawijayaもあり、高地地方の気候は温暖で、草で覆われた広大な谷間が多く人口も比較的多いが、逆に熱帯雨林と湿地帯に分かれる低地地方は熱帯気候で高温多湿であり比較的人口が希薄である。高地地方の人々の多くはヤムイモ、タロイモ、サツマイモなどを主作物とする定住民である。一方、低地地方の熱帯雨林や湿地帯には狩猟採集民が多い⁽³⁾。

ニュー・ギニアには、過去の一連の植民地化を通して、Tok Pisin、英語、それにMalay語がもたらされた。このうち、英語はオーストラリア人がもたらした言語であり、Malay語はオランダ人 (後にインドネシア政府) の言語であった。ところがTok Pisinは、ある意味では、外から進入してきた言語というよりは、New Britain島東部、つまりRabaul付近での民族接触という状況下で成長したものだ。ところが、その語彙のほぼ80%は英語に由来するので、この意味では外部から進入してきた言語と見做すこともできる。

現在、Tok Pisin (あるいは、New Guinea Pidgin) は、パプア・ニューギニアでの3つの公用語のひとつであり、約300~400万人に及ぶ、この国では群を抜いて多い話者数をもつ「共通語 (lingua franca)」である。そしてその話者数は現在でも

急速に増加しつつある。特に、「旧委任統治領 New Guinea」地域で最も認知度が高く、20世紀初頭からこの地域の主要な共通語として機能してきたのであり、現在も Papua 地区に急速に広がりつつある。具体的には、「セピク川流域 (the Sepik basin)」、「マダング州 (Madang Province)」、「ニュー・ブリテン島 (New Britain)」及び「ニュー・アイルランド島 (New Ireland)」など多くの地域で、一部の老人たちを除けば、ほとんど普及している。また、パプア・ニューギニアの多くの都市部では広範にわたって Tok Pisin のクレオール化が進行している。現在、Top Pisin の第一言語話者 (母語話者) の数は約 12 万人とされている。だが、各地域の都市化に伴い、この数も増加が予測される。言語的特徴のレベルとしては、おおむね「拡大型ピジン (an expanded pidgin)」といえる。つまり、発達の後期段階に達してから徐々にクレオール化しつつあるタイプのピジンである。ただし、国内各地には様々な話者がいて、中には初期段階のピジンの特徴を示す様々な変種を使う人もいようだ。例えば、偏狭の地域では「接触混合語 (contact jargon)」あるいは「簡略型ピジン (reduced pidgin)」とも言うべきレベルの変種を使用している人々もいると思われる。

トク・ピジンの初期の歴史については文献が乏しく、推測の域を出ないのだが、19世紀後半にドイツ人植民者たちが入植する以前から、英語を基礎にしたある種の変種がニュー・ギニア、特にニュー・ブリテン島やニュー・アイルランド島で話されていたと思われる。すでに 1840 年代にヨーロッパ人たちのニュー・ギニア地域に対する興味は増大し、この頃に探検家、宣教師、そして「なまこ (beach-lamar)」、「ビャクダン (sandalwood)」、「真珠」、「コプラ (copra) : ヤシ油の原料」などを扱う商人がここを訪れており。特に、「ニュー・アイルランド (New Ireland)」はオーストラリアから中国に向かう船の航路上にあったから、ここへの初期の訪問者たちは、おそらく Chinese Pidgin English の影響を受けた「隠語 (jargon)」のような変種を用いてコミュニケーションが成された可能性がある。しかし、この種の変種の語彙は少なく、文法構造も不安定かつ多様なものであったと推測される⁽⁴⁾。

その安定性がさらに進んだのは実はドイツ人の到来によるもので、彼らが広大な地域を制圧し、土着の人々が部族を超えて意思疎通を図らねばならないような

状況をつくったからである。しかも、ニュー・ブリテン島及びニュー・アイルランド島で発展したプランテーション地域では、部族間同士の意思疎通のために共通語がさしあたって緊急に必要な状況にあったので、まさに Tok Pisin がこの役割を果たすこととなったと思われる。1860年代になって、「サモア (Samoa)」にドイツの会社がコブラのプランテーションを建設して以来、太平洋地区ではドイツの影響が増大することになった。これらサモアのプランテーションが、「ドイツ領ニュー・ギニア (German New Guinea)」、特に「ビスマーク諸島 (The Bismarck Archipelago)」における Pidgin English の確立に役立つことになった。1880年代及びそれ以降にサモアから返ってきた労働者たちの間で、「共通語 (lingua franca)」として広く使われるようになったからである。ニュー・ギニアにおける最初のドイツ系プランテーションではこれらの帰還労働者たちを使っており、実は彼らが、その後に来た労働者たちによって使われることになった接触言語のモデルを定着させたのである。

ドイツ人たちは、労働者たちが Pidgin English を使うのは (ライバルである英国と連想させるので) あまり好まず、1900年以降はニュー・ギニアでドイツ語を使用することを積極的に奨励したのだが、初期の段階ですでにこのピジン (Pidgin English) がかなり定着していたために、最初のプランテーションと商業の中心であったビスマーク諸島の住民との間でのコミュニケーションにおいて日常の諸問題を処理するのに Pidgin English がおおいに役立つこととなった。一方、ドイツ人たちはこのピジンを完全に外国語と見做しており、しかもこの期間は Pidgin English にある程度自由裁量権を与えていた。そのために、さらに「安定化 (stabilization)」が促進されることとなった。

ここで注目すべきことは、この時点での「上層言語 (superstrate language) : 植民地支配者の言語」はドイツ語であって、英語ではなかったことである。そして、「基層言語 (substrate language) : 被征服者の言語」、つまりプランテーション労働者の多くの土着母語、は Tolai 語あるいはこれと深い関係にあるニュー・アイルランド島の土着言語であったということである。したがって、この両言語が当時の Tok Pisin の発達に重要な役割を果たしたと思われる。今日の Tok Pisin の語彙は、英語に由来するものが約80%、Tolai 語に由来するものが約10%、ドイツ語に由来する

ものが約4%とされている。そして、文法構造の多くは Tolai 語との類似点が多いので⁽⁵⁾、おそらくそこに由来すると思われる。サモアで最初に雇用された労働者の多くは、New Britain 島と New Ireland 島間の海峡に浮かぶ小島 Duke of York 周辺の出身者たちであったので、この地域で話されていた Tolai 語及びこれに関連のある言語が、サモアとニュー・ギニア両方の Pidgins を形成する上で重要な役割を果たした。Duke of York 島は他の地域からの労働者を募集する上で重要な拠点であったこと、またこの島及び近隣の首都であったラバウルで話されていた Pidgin English が相対的に権威を持つようになったことなどから、このピジンが他の地域で話されていた諸変種に影響を及ぼし、Tolai 語からの基層の特徴を他の地域に広めることになった。このように、全体として、地元の土着言語の語彙がピジンに多大な影響を及ぼしている；Hall (1966:94) はこの種の単語が全体の 20% を占めており、その割合は他のヨーロッパの言語系ピジンよりもはるかに高いと見積もっている⁽⁶⁾。

第一次世界大戦勃発以後、この地域の状況が変わる。即ち、1914 年にオーストラリアが、ドイツ領ニュー・ギニアを占領し、1920 年にこの地を国際連盟から委任統治領として獲得する。一方、南東部ニュー・ギニアは、1906 年にすでに英国の保護領から「オーストラリア領パプア (the Australian Territory of Papua)」となっていた。そして、オーストラリア行政府も以前のドイツ行政府と同様、Tok Pisin を良しとせず、その撲滅政策を打ち出した。Tok Pisin の代わりに「簡素な英語 (simple English)」、それがだめならば「ヒリ・モツ語 (Hiri Motu)」を奨励する言語政策を実施し、ある程度の効果をもたらした。つまり、「パプア人のためのパプア (“Papua for Papuans”)」運動のキャッチフレーズの下に、両者 (英語と Tok Pisin) のギャップを埋める形で Hiri Motu がある程度普及し、Tok Pisin と Hiri Motu がパプアにおける共通語として競合する結果となった⁽⁷⁾。状況としては、Hiri Motu は現状を維持し、Tok Pisin は都市部の中心からさらにその周囲の地域にも広がりつつある。

トク・ピシンが普及した理由の一つに、プランテーションの労働者の募集方法が挙げられる。当時、プランテーションの労働者は様々な遠隔地から集められたが、その後また彼らを各地に送還するという慣習があった。このような労働者の流動性が Tok Pisin の地方への波及を促し、その結果として今日でも旧委任統治領

の多くの地域で Tok Pisin が普及することとなったのである。また、個々の地域内での Tok Pisin の普及状況については、年齢と性別に差があるようだ。比較的最近に接触を起こした地域では、最近になって Tok Pisin がもたらされたために、年長の人々は Tok Pisin を知らないかもしれない。また地域によっては、女性が、それも年長の女性が、Tok Pisin を知らない可能性がある。それは、プランテーションでの労働者として契約したのは男性だからであり、さらに外部の村との接触を持つのは主に男性だからである。例えば、セピク川上流地域の「アンゴール族 (the Anggor)」の間では、男性とは対照的に、女性は積極的に Tok Pisin を学ぼうとしなかったようだ⁽⁸⁾。

オーストラリア行政府の言語政策や、現場での英語母語話者としての彼らと、Tok Pisin 話者としての現地人との比較的頻繁な対話（例えば、白人家庭での召使として）の中から、いわゆる「再ピジン化 (re-pidginization)」が起こり、Tok Masta と呼ばれる Tok Pisin の新バージョンなるものも生まれた⁽⁹⁾。これは、白人と現地人とのいわば主従関係の会話のやり取り中で生まれた一種の社会方言としての Tok Pisin といえる。また、Tok Pisin を話す現地人たちの、鉱山、商業、産業、漁業、下級管理職などの分野での雇用が進み、彼らが各界で活躍するようになると、特に都市地域を中心にこの種の Tok Pisin が新しい文化の伝達手段としてさらに広範に普及するようになる。

宣教師たちによる布教活動も Tok Pisin の拡大に貢献した。彼らは Tok Pisin による聖書の翻訳のために、Tok Pisin を徹底的に研究し、それが語彙、つづり字および文法の標準化を促した。そして、オーストラリア行政府から派遣された偵察隊によるニュー・ギニア高地地方への開拓と支配の拡大は、彼らの活動や宣教師たちの布教活動による現地人との交流を通して、ますます Tok Pisin の広範な遠隔地への普及を促すことになったであろう。

第二次世界大戦中に、日本軍がニュー・ギニアに進駐して、その大部分を占領したことも、Tok Pisin の全国的な普及を促進することになった。オーストラリア軍、アメリカ軍、そして日本軍の飛行機が、ニュー・ギニア全土に投下した無数の宣伝紙に Tok Pisin が使われたからだ。また、オーストラリア人たちは自国の防衛のためにパプア・ニューギニアの人々と友好関係を保ちつつ、協力して日本軍

と戦った。一方、パプア・ニューギニア社会では、その混乱の中で、戦前の民族間の階層関係が崩壊し、平等意識が芽生える。戦後に約束されていた自治というものを先住民たちが意識しだすにつれて益々それが成長していく。また、オーストラリア人との交流を通して、Tok Pisinはますます英語の影響を受けることになるが、その傾向は主として都市地域で著しく、田舎の地方ではそれほどでもない。したがって、都市部と農村部のTok Pisin話者同士がお互いに理解が困難になるケースも出ているようだ。その結果、最終的に予測できることは、ジャマイカン・クレオールを初めとして、世界の多くのピジン・クレオールがそうであったように、標準英語を一方の極とし、「基層方言 (basilect)」としてのTok Pisinを他方の極とする一連の言語連続体の形成である。その中間に様々な「中層方言 (mesolects)」としてのTok Pisinsが位置づけられることになるが、意図的なコードスイッチングの習慣が見られるとの報告もあるので、今後そのような言語状況になるかどうかは微妙である⁽¹⁰⁾。

Muhlhausler (1977b)は、トク・ピシンに関して、3つの社会方言としての変種を類別した。まずその一つは、Tok Pisinが余り頻繁に使われていない遠隔の地域、例えば中央高地地方及びその他で最近発展してきた地域などで話されている「未開地の諸変種 (the bush varieties)」である。これらの変種には、かなり強い第一言語の干渉が見られるという特徴がある。これに対し、最も広範に普及しているTok Pisinの変種は、「田舎地域の変種 (the rural variety)」である。これは「旧委任統治領 (the old Mandated Territory)」のなかでも、圧倒的に低地地方の変種であり、新聞『Wantok』誌など、Tok Pisinによる出版物に使われている標準変種でもある。この変種は最も安定している変種であるが、それは極めて多様な言語的背景を持った話者たちに共通して主要なコミュニケーション手段であったからである。このような状況は、相互理解を妨げないようにと、その安定保存を促す効果をもたらす。最後は、「都市地域のTok Pisinの諸変種 (the urban varieties)」であり、英語を自由に話せる話者たちによって話される変種であり、そのような人々が集中している都市地域で話される変種である。この種の変種は、英語と「二言語使用の (diglossic)」関係にあり、英語の影響が全域にわたって明白である。特に、音韻、語彙、だけでなく文法においてもそうである。目標言語としての英語の影響が圧

倒的に強いため、この種のトク・ピシンの変種は常に不安定であり、しかも「田舎の変種」の話者と「都市部の変種」の話者との間にコミュニケーション上の困難をもたらすことにもなる。トク・ピシンの公的な立場からの標準化（言語政策）がなされていないということが、少なからずこのような混乱の要因になっている。仮にトク・ピシンの標準化ということになれば、おそらく「農村地域のトク・ピシン」をその基本とすべきであろう。この変種が最も広範な地域に普及しているからである。しかし、その語彙には何らかの追加、おそらく「都市地域のトク・ピシンの変種」（最終的には英語からのものであろうが）からの借用語による追加が必要であろう。

1. 1. トク・ピシンの音韻的特徴とつづり字⁽¹¹⁾

1) 語尾子音連結の単純化（最終子音の脱落）⁽¹²⁾ がつづり字に反映されている。つまり、語尾子音連結を示すつづり字〈-st, -nt, -ct, -nd, -ld, -mp〉からそれぞれ〈t, d, p〉が削除され、最終子音 /t, d, p/ が脱落していることを示している。

〈-st〉 : Ogas (<August), dentis (<dentist), das (<dust), es (<east), eksosopaip (<exhaust pipe), passim (<fasten), hapkas (<half-cast), etc.

〈-nt〉 : simen (<cement), Haus Palamen (<House of Parliament), fran (<front), gavman (<government), etc.

〈-ct〉 : distrik (<district)

〈-nd〉 : han (<hand), win (<wind), winim (<wind-im=blow), boipren (<boyfriend), daimen (<diamond), raun (<round), ailan (<island), kain (<kind), pren (<friend), etc.

〈-ld〉 : wel (<wild), welpik (<wild pig), kol (<cold), gol (<gold), holim (<hold), etc.

〈-mp〉 : bamim (<bamp-im=bump), lam (<lamp), etc.

2) 側音 (lateral) 系については、「有声・歯茎・側音 (voiced alveolar lateral)」 /l/ が、母音化したり、脱落したりするため、つづり字にその音韻的特徴が忠実に反映される。また、ごく僅かではあるが、標準英語の「有声・後部歯茎・半母

音 (voiced postalveolar semivowel) /r/ がトク・ピシンで「有声・歯茎・側音 (voiced alveolar lateral) /l/ となることもあり、つづり字にその音韻的特徴が反映される。

- /l/ ⇒ 母音化 ⇒ φ : <l> ⇒ φ
orait (<all right), hap (<half), hapkas (<half-cast), hap pas seven (<half past seven), hapim (<halve), etc.
- /r/ ⇒ /l/ : <r> ⇒ <l>
laplap (<wrap wrap=colth), tulait (<too bright=very bright), lait (<bright), etc.

3) その他の音素・音節の脱落

- i) <語頭の音素・音節> : 語頭のつづり字 <a—>、<b—>、<e—>などが示す音素や音節が脱落する。

pret (<afraid), gen (<again), long (<along), lait (<bright), lektrik (<electric), gohet (<go ahead), etc.

- ii) <語中の音素・音節> : 語中のつづり字 <—ter—>、<—ed—>、<—ing—>、<—em—>、<—nd—>、<—to—>などが示す音素や音節が脱落する。

apinum (<afternoon=evening (early)), parairais (<fried rice), praipan (<frying pan), gavman (<government), hakisip (<handkerchief), hap kaikai bilong asde (<half food belong yesterday), olgeta (<altogether=completely), hapasde (<half yesterday), etc.

- iii) <語尾の音素・音節> : 語尾のつづり字 <—ly>、<—ll>、<—be>などが示す音素や音節が脱落する。

bel (<belly), orait (<all right), golo (<globe), etc.

4) 子音挿入⁽¹³⁾

hama / hamarim (<hammer)⁽¹⁴⁾, harim (<hear), haisapim / apim (<high up / up=hoist, lift up), etc.

- 5) 歯間摩擦音 (interdental fricative) 系については、標準英語の「無声・歯間・摩擦音 (voiceless interdental fricative) /ð/ が、トク・ピシンでは「無声・歯茎・閉止音 (voiceless

alveolar stop) / t / に、また「有声・歯間・摩擦音 (voiced interdental fricative) / ð / は「有声・歯茎・閉止音 (voiced alveolar stop) / d /、「有声・後部歯茎・半母音 (voiced postalveolar semivowel) / r /、「無声・歯茎・摩擦音 (voiceless alveolar fricative) / s /あるいは「無声・歯茎・閉止音 (voiceless alveolar stop) / t /などになる。標準英語では / θ / 及び / ð / のつづり字は一貫して < th > でつづられるが、トク・ピシンでは < t >、< d >、< s > 及び < r > でつづられる。一般に、英語の様々な変種 (米国黒人英語、他のピジン・クレオール、スコットランド方言、等) では、有声音 / ð / は < d > で、無声音 / θ / は < t > でつづられる傾向にあるのだが、トク・ピシンでは必ずしもこの傾向を示さず、さらに多様性が増す。

・ / θ / ⇒ / t / : < th > ⇒ < t >

katolik (<catholic), saut (<South), ting / tingting (<think), etc.

・ / ð / ⇒ / d, r, s, t / : < th > ⇒ < d, r, s, t >

/ d / : hidden (<heathen)

/ r / : narapela (<anotherpela), arasait (<other side), etc.

/ s / : klos (<clothes)

/ t / : ating (<either), brata (<brother), etc.

6) Post-vocalic / r / の脱落⁽¹⁵⁾がみられ、それがつづり字に反映されている。

<子音直前 : V_C > : 様々な子音 < m, b, s, g, t, n, w, l, k, d > の直前で Post-vocalic / r / の脱落が起こるのであり、直後の子音についての制約はなさそうだ。

epot (<airport), ami (<army), baman (<barman), mobeta (<more better), kabureta (<carburetor), kas (<cards), kago (<cargo), katen (<carton), sot (<short), tanim (<turn), kon (<corn), kona (<corner), kos (<course), kot (<court), etc.

<語尾 > : Post-vocalic / r / が脱落したことにより、最終語尾が母音字 < a > となるケースが圧倒的に多く、これはトク・ピシンの単語構成上の音響的特徴を印象付けるものであり、トク・ピシンの音韻上の大きな特徴といえ、それがつづり字に反映されている。

akeselareta (<accelerator), plasta (<adhesive plaster), alta (<altar), anka (<anchor), ba (<bar), bia (<beer), bipo (<before), mobeta (<more better), masta (<master), brata

(<brother), bata (<butter), calenda (<calendar), ka (<car), etc.

7) 反復による表現：音節や単語を反復して、新たな意味を持つ単語や表現を形成するという語句形成は、世界各地のピジン・クレオールに共通した特徴である。少ない語彙をこのような方法で補うというのも、ある意味では接触言語のもつ単純化であり、合理性でもある。この種の表現形式は単語・句表現それぞれに多数見られる。

i) 音節の反復型：単語を構成する音節の反復を含むもので、多くの場合、音節そのものには内容的意味はない。

amamas / hamamas (=happy), ananas / painap (=pineapple), banana (=banana), bel i tantanim (=nauseated), bombom / bumbum (=coconut frond), buskanaka (=bush villager), dukduk (=ritual costume representing a spirit), gamtri / kamarere (=eucalyptus tree, gum tree), gorgor / kawawar (=ginger), kakaruk (=chook, fowl, chicken), kaukau (=sweet potato), kokomo (=hornbill bird), etc.

ii) 単語の反復：内容的意味を持つ単語の反復で構成されている一種の複合語である。したがって、複合語全体の表す意味は、繰り返される単語の意味と深い関係があり、少ない語彙を補強するというピジン・クレオールに共通した特徴を成す。

waswas (<wash wash=bathe, shower (n.), wash,), kainkain (<kind kind=all sort of, various kinds of), paspas (=band), wilwil (<wheel wheel=bicycle), kaikai (<food), kaikaim (<food=bite), laplap (<wrap wrap=cloth), kuskus (=clerk), etc.

iii) 複合語の反復型

painimautim (<painim (=find) +tautim (=out) =discover), etc.

iv) 三回以上の反復型

abababa (=bubble gum),

v) 句表現：内容的意味を持つ単語の反復であり、当然前述の「単語の反復で構成される複合語」の場合と同様に、単語の意味と深い関係のある意味を表す。

isi isi (carefully), orait orait (<all right all right=certainly), wanpela wanpela (<one pela one pela=each), wan wan (<one one=few), lik lik (<lik lik (=little) =few), ples

waswas (<place wash wash=bathroom), rum bilong waswas (<room belong wash wash=bathroom), toktok wantaim (<talk talk one time=converse with), laplap bilong windo (<wrap wrap(=cloth) belong window=curtain), pasim tingting (<close think think=decide), switpela kaikai (<sweet pela kai kai(=food)=dessert), etc.

- 8) kの多用:「有声・軟口蓋・閉止音 (voiced velar stop) / g / が無声音化して、「無声・軟口蓋・閉止音 (voiceless velar stop) / k / となり、それがつづり字に反映され<k>となる。これらの音素はそれぞれ調音点・調音方法がともに同じで、有声・無声の違いだけであり、有声音の無声音化現象といえる。

/g/⇒/k/: bek (<bag), pik (<pig), welpik (<wild pig), koan! (<go on!), kirap / sanap (<get up / sun up=get up), etc.

cf. beng (<bank), dring (<drink (n.)),⁽¹⁶⁾

一方、「無声・軟口蓋・閉止音 (voiceless velar stop)」 / k / を表すのには一貫して、つづり字<k>が用いられ、原則として標準英語の場合のようなく<c>は用いられない。これはトク・ピシンとしてはきわめて明白なつづり字の特徴であり、掲示、プラカード、看板などでこのつづり字が使われているのを見かけると、標準英語のつづり字に慣れきった者(我々)にとっては、視覚的に最も目立つ特徴の一つといえる。

kros (<cross=angry), kaptan (<captain), bisket (<biscuit), kabis (<cabbage), kek (<cake), kalenda (<calendar), kamera (<camera), ken (<can, could), kandel (<candle), kanu (<canoe), ka / kar (<car), kabureta (<carburetor), kas (<cards), kago (<cargo), etc.

また、標準英語の「無声・軟口蓋・閉止音 (voiceless velar stop)」 / k / を示すつづり字<ch>および<ck>が<k>でつづられる。一般に、<ch>⇒<k>は語頭と語中で、<ck>⇒<k>は語中と語尾に現れる⁽¹⁷⁾。

<ch>: Kristen (<Christian), krismas (<Christmas), skul (<school), anka (<anchor)

<ck>: baksait (<backside=rear), bek (<back), bekbun (<backbone), kilok (<clock),

bek (<back), kok (<cock=penis), aisblok (<iceblock), jek (<jack), etc.

その他に、標準英語では、「語尾子音連結 (final consonant cluster)」 / ks / が<x>でつづられるが、トク・ピシンでは<kis>あるいは<ks>でつづられる。

< x > ⇒ < kis, ks > : akis (<axe), bokis (<box), piksim (<fix),// giabokis (<gearbox), seks (<sex), bokis ais (<box ice=ice chest, refrigerator), etc.

2. ジャマイカン・クレオール (Jamaican Creole)

ジャマイカは、カリブ海に浮かぶ島国で、3世紀に及ぶ英国の植民地を経て、1962年に独立し、英連邦の一員になった比較的新しい国である。人口は約270万人(2005年)¹⁸⁾、面積は11,424平方キロメートル(秋田県とほぼ同じ広さ)で、長さ234キロメートル、最長幅82キロメートルの東西に長い小島だが、カリブ海の中では3番目に大きな島で、キューバ島、ヒスパニオラ島(ハイチとドミニカ共和国からなる)、プエルト・リコ島などと共に「大アンチル諸島(Greater Antilles)」を構成している。平野は全島の15%を占めるにすぎず、島の大部分は丘陵と山地で、中央東部をコーヒー豆の栽培で有名な山脈、Blue Mountainsが東西に走り、最高点は2500メートルに達する。丘陵地帯は温帯に近いが、低地地方は熱帯性の気候で、例えば首都Kingstonでは年平均気温は26.7℃である。国の主な産業は、ボーキサイト及びアルミナを中心とした鉱業、コーヒー、砂糖(サトウキビ)、バナナなどの熱帯農業、それに美しい自然と熱帯の気候を生かした観光事業である。

カリブ海諸国では、ヨーロッパの諸言語(スペイン語、ポルトガル語、英語、フランス語、オランダ語など)と現地語との間に生まれた接触言語、「ピジン(pidgins)」に由来する各種「クレオール(creoles)」が話されており、その話者たちはこれらの島々の主な先住民族であった「アラワク民族(Arawak)」ではなく、16世紀から18世紀にかけて、ヨーロッパ人により、砂糖園を中心としたプランテーションでの労働力確保のために、西アフリカから奴隷として輸入された黒人たちの子孫を指す。例えば、ジャマイカ国民の91%はこうしたアフリカ系黒人たちである¹⁹⁾。このような各種クレオールの中で、英語系クレオールが使用されているのは、ジャマイカのほかに、トリニダード・トバゴ、ガイアナ共和国、バルバドス、バハマ諸島、グレナダ、セント・ビンセント、アンティグワ、モンツアラト、セント・キッツ、ネビス、アンギラ、バージン諸島などである。いずれも3世紀にわたる英国の領土としての歴史があり、常に英語との接触を通してその影響を受けながら発達し、クレオール化が進行したために、英語、それもイギリス英語の

特徴を随所に残すものとなった⁽²⁰⁾。

世界中の英語系クレオールには、その言語的特徴に多くの類似性があり、特に形態・文法構造及び音韻的特徴において顕著である。例えば、カリブ海及び米国における黒人奴隷たちによって最初に使われたプランテーション・クレオールには、西アフリカの諸言語の影響が色濃く見られたが、その後の強力な白人英語話者達との接触の結果、ますます英語の影響にさらされることとなった。このように、優勢な親言語の方向へと移行させようとする圧力の存在する地域では、「クレオール以後の言語連続体 (post-creole continuum)」が形成されることとなる。この連続体の片方の端には、社会的に最も威信のある変種“acrolect”、つまり標準的な方言に最も近い変種が存在し、一方反対側の端には最も威信のない変種“basilect”が存在する。そして、この両極の間には複数の中間変種“mesolect”が存在する。このうち、“acrolect”が強力に制度化された英語の変種へと発展するような場合には、「脱クレオール化 (decreolization)」と言われる段階が起こりうる。この段階が生ずると、それ以外のクレオールの諸変種に対する汚名度が増加し、公式の場や教育の場から除外されることになるかもしれない。こうなると、時として、最終的にはクレオールそのものも一緒に消滅するという事態に発展することもありうる。ただし、そのクレオールの最終的な運命はその話者たちがそのクレオールを評価し守ろうとするかどうかとその方法に依存することが多い。例えば、「ジャマイカン・パトワ (Jamaican Patwa)」とも呼ばれるジャマイカにおける英語系クレオールは、西インド諸島の人々が英語圏の国々、特に英国に移住したことによって、また人気のあるカリブ海文化、特にレゲエ音楽の多大なる影響によって、国際的に広く知られるようになった。英国に移住した多くのジャマイカ人たちは、日常生活で、また「歌詞 (song lyrics)」、「詩」などにおいてパトワの積極的な使用を維持してきており、しかもパトワを使うこと自体が、主流の文化からの圧力に対する反抗の象徴であり、教育の場や職場において優勢集団の間で当然のごとくに受け入れられている彼らへの不当な迫害に対する反抗の象徴であることが多い⁽²¹⁾。

2. 1. ジャマイカン・クレオールの音韻的特徴とつづり字⁽²²⁾

1) 「最終語尾子音連結 (Final Consonant Clusters)」の単純化：最終子音の「無声

音化」、「簡略化」及び「脱落」が見られる。

accep (<accept), adap (<adapt), Ahgus (<August), an (<hand), arres (<arrest), baddis (=badis<baddest), bans (<bands), beas (<beast), behine (<behind), behole (<behold), ben (<bend), bess / bes (<best), bigges / biggis (<biggest), bline (<blind), boas (<boast), etc.

cf. grung (<ground)

2) <l, d>⇒母音化⇒φ：子音 /l/, /d/ が母音化したり脱落したりする。

awrite (<all right), azways (<always), bendung (<bend down), foo / fu (<fool), etc.

<l>⇒<r>：音素 /l/ が半母音 /r/ になることがあり、それがつづり字に反映される。

direc (<dialect)

3) 語頭・語中・語尾の音(節)が脱落することがある。

i) 語頭

boat / boht / bout(<about), ca / caa / caw (<because), catch / cratch(<scratch), ceitful (<deceitful), dacta (<conductor), coo / cu / ku (<look), coodeh (<look there), cooyah / cuyah (<look here, look you), craas / crass / craas (<across), etc.

語頭の音素 /h/ が脱落する。

aaspital (=aspital<hospital), affi (=haffi<have to), ammasi (<have mercy), an (<hand), appie (<happy), ar (<her), arbor (=arbour<harbor), art (<heart), at (<hat), 'at (<hot), av=(ave<have), awa (=hour), ear (<hear), eavy (<heavy), ello (<hello), etc.

【つづり字だけが残留するケース】：head, healt, heaby, hear, hears, heat, heavy,

heet(<eat), heetch, m hedge, etc.

ただし、単語の最初が母音で始まるときには音素 /h/ が付加されることがある。

heat (<eat), hask (<ask), heat (<eat), hegg (<egg), hiez / ears / ies (<ears), hile (<oil), heeven (<even), hears (<ears), heetch(<itchy), etc.

ii) 語中

Febry (<February)

iii) 語尾

braa / bra / brer (<brother), coulda (<could have), cunny (<cunning), cyai (<carry it), Dadoo! (<Don't do it!), diss / dis (<disrespect), doah / doan (<don't), getti / getty (<get it), Gi (<give), gooda (<woulda<would have), ha (<have), haffi (<have to), etc. 前述の、最終語尾子音連結の「無声音化」、「簡略化」及び「脱落」などの現象は、ある意味では子音連結を避けようとする普遍的現象であるが、そのほかの例として次のようなものが発見できた。

affa (<after), affi (<have to), areddi (<already), atta (<after), etc.

- 4) 語頭や語中に、/k/, /w/, /y/, /t/, /b/, /n/, /g/ などの子音が挿入されることがあり、つづり字にそれが反映される。

bunks (<bounce), bwaile / bwile (<boil), bwoy / bwai (<boy), cyar / cyaar (<car), cyane (<cane), deestant / destant (<decent), fambilly / fambly (<family), fishnin (<fishing), foolynish (<foolish), gyaabige (<garbage), gyal / gal (<girl), gyap (<gap), gyarden (<garden); dung (<down); yai (<eye), etc.

また、語頭に母音(音節)が付加されたり、二重母音の各母音の交換がみられる。

astray (<stray), bluo (<blow), etc.

- 5) <th>⇒<dd, d,>, <th>⇒<t> : 「有声・歯間・摩擦音」/ð/ が /d/ に、「無声・歯間・摩擦音」/θ/ が /t/ となる傾向があり、それがつづり字に反映される。その結果、例えば oath と oat 及び、though と dough が同音異義語的關係となる。

/ ð / : adda/ada (<other), aldoah (<although), altogeder (<altogether), anada / annada / anneda (<another), fahda (<father), mada (<mother), badda / bodder / bada (<bother), bredda / bredah (<brother), da / dah / a (<that, the), dan (<than), dat (<that), de (<the), dem (<them), den (<then), dese (<these), etc.

/ θ / : authority (<authority), boat (<both), breat (<breath), chute (<truth), claat / clot / claut / clawt / clot / clout (<cloth), det (<death), eartquake /

earthshake(<earthquake), everyting (<everything), faitfull (<faithful), healt (<health), etc.

cf. anutha (<another),

6) Post-vocalic /r/ ⇒ φ : Non-rhoticである。つまり、cardやwaterなどのように、母音直後（あるいは子音直前や語尾）で /r/ が発音されない。

i) <語尾> : Post-vocalic /r/が脱落したことにより、最終語尾が母音字<a>となるケースが圧倒的に多く、これはトク・ピシンの場合と同様に、ジャマイカン・クレオールの一語構成上の音響的特徴を印象付けるものでもあり、それがつづり字に反映されている。

afta (<after), anda (=unda<under), anywhe (<anywhere), fahda (<father), mada (<mother), badda (=bada<bother), benta (<venture), betta (<better), bigga (<bigger), cabba (<cover), cella (<celler), chatta (<chatter), chokey (<choker), rubbas (<rubbers), coodeh (<look there), cooyah (<look here), etc.

cf. betteration (<better),

ii) <子音直前 : V_C> : 様々な子音 /d, k, n, f, ch, s/ の直前で Post-vocalic /r/ の脱落が起こるのであり、直後の子音についての制約はなさそうだ。

aftawud (<afterward), baak (<bark), baan (<burn), bad wud (<bad word), tun bad (<turn bad), ban (<burn), boad (<board), bood / bud (<bird), buttafly (<butterfly), caad (<card), caan (<corn), cawd (<cord), chuch (<church), dutty / doti (<dirty), etc.

7) 反復による表現 : 単語や音節を繰り返して新たな意味を付加する造語・表現方法は、少ない語彙を補うためのいくつかの方法の一つであり、世界中に分布しているピジン・クレオールに共通した特徴である。前述の、トク・ピシンにも広範に見られ、さらに多様な形態を持っている。

picky-picky (=choosy), one one (=all alone), back back (=turn upside down), bada bada (<bother too much, annoy), bangarang (=noise, fuss), bata bata (=batter repeatedly), beg-beg (<beg persistently), begibegi (=begibegiman=begger), boonoonous (=wonderful), bram-bram, cabba-cabba, chaka-chaka / chuck-up chuck-up, chat-chat, chi-chi, chi-chi bud (<a little bird),

chi-chi bus (JUTC bus), chi-chiman (<homosexual, gay man>), choogoo choogoo, cry-cry, cuss-cuss / kass-kass, cutie cutie, etc.

- 8) kの多用：音素 /t/ が同じ調音法（閉止音系）の /k/ となることがあり、それがつづり字に反映され < t > ⇒ < k > となる。

bokkle / bokl (<bottle>), genkly (<gently>), etc.

cf. cangle (<candle>), hangle (<handle>), etc.

- 9) 「ジャマイカン・パトワ」独特の造語が見られる。

appricilove (=appreci+ate (hate)⇒appreci+love), fashionist, facialist, fretration, frightenation (=fright), haul'n' (<hold on(=don't)>), politricks(=politics+trick), politrickster/ polytrickster (=politic+trickster), etc.

(以下、次号に続く)

【註】

- (1) トクピ・シンのつづり字法・語彙・句表現の特徴について詳しくは、拙稿 (2008a : 117-193) および、同 (2008b : 263-285) を参照のこと。
- (2) 外務省 (Ministry of Foreign Affairs of Japan) の「バプアニューギニア独立国」の 2008 年 4 月現在のホームページ (mhtml:file://E:/外務省バプアニューギニア独立国.mht) を参照。
- (3) ニュー・ギニアに人類が住み始めたのは少なくとも 40,000 年前であり、人類学的にはアウストラロイド（オーストラリア先住民およびその人種の特徴を持つオーストラリア周辺の類縁人種を意味し、19 世紀の人類学的人種観に基づく用語で、今日では侮蔑語的とされている）。バプア人 (Papuan) は明るい赤褐色から黒色の肌をしており、ちぢれ髪をしている。ちなみに、Papua の語源は「ちぢれ毛」という意味のマレー語に由来する。(Chowning:1977) また、ニュー・ギニア (New Guinea) という名称は、スペインの海洋探検家オルティス・デ・レーテス (Ortiz de Retes) が命名したもので、おそらく褐色の肌とちぢれ毛の原住民を見て、西アフリカのギニア海岸に住む原住民を連想したからであろう。
- (4) Muhlhausler (1977a) によれば、その語彙の規模は 200 語から 500 語程度で、その文法構造はかなりの多様性があり、不安定な要素があったという。
- (5) U. Mosel (1981) を参照。
- (6) また、Muhlhausler (1979:199ff) は、Coastal Malay からの借入語を 15 語、ドイツ語からの借入

語を約150語確認しているが、特に後者（ドイツ語からの借入語）については現在はその大部分が古語となっていると思われる。

- (7) P. Muhlhausler and T. Dutton. (1979 : 209-223) を参照。
- (8) William A. Foley. 1986. *The Papuan Languages of New Guinea*. Cambridge: CUP, p.37
- (9) P. Muhlhausler. 1979. "Growth and Structure of the Lexicon of New Guinea Pidgin." *Pacific Linguistics*. C52. 199 ff.
- (10) P. Muhlhausler. 1982. "Tok Pisin in Papua New Guinea" In Bailey and Gorlach (eds) 1982: 455.
- (11) 以下に紹介する tok・ピシンの言語的特徴には、杉本 (2008a) の一部を再分類し、修正加筆したものが含まれている。
- (12) この種の語尾子音連結の単純化は、tok・ピシンだけの特徴ではなく、「米国黒人英語 (African American Vernacular English)」, 世界各地のピジン・クレオール、グラスゴー方言を初めとする英国各地の地域方言などにも頻繁に見られる音声の特徴である。特に、動詞の語尾子音連結における最終子音 /v/ や /d/ の脱落は、英語の過去時制を示す接尾辞 <-ed> の発音の脱落を意味し、動詞の語尾屈折の形態に混乱をもたらすことにもなる。また、この「語尾子音連結の単純化」は、最終子音を脱落させることによる「子音連結の回避」という普遍的現象とも解釈できる。特に、これらの変種の成立に関わった、あるいは影響を及ぼしたと思われる片方の言語が、共通して <CC> 型 (つまり、子音連結を持つ) 言語ではなく、<CV 型> の語形態を持つ言語の場合、特にその傾向が強いといえる。
- (13) 母音連結 <V+V> を避け、<C+V> という規則性を維持するために、子音が挿入される。
- (14) 「挿入の r (Intrusive r)」という現象で、hama に接尾辞 -im が付加され、hama-im となると母音が重なることになるため、それを避けるために、子音の r が間に挿入され、<C+V> の規則性を維持しようとする現象と解釈できる。次例の harim, haisapim も同様の現象と見られる。
- (15) 「母音直後の /r/ (Post-vocalic /r/) の脱落も、語尾子音連結の単純化と同様、必ずしも tok・ピシンだけの特徴ではない。英米の各地域によって、この音素 /r/ を発音する (rhotic) 方言地域と発音しない (non-rhotic) 方言地域とがある。米国南部や米国黒人英語などは一般に発音しないし、標準的イギリス英語の発音あるいは「容認発音 (Received Pronunciation)」などでもこの /r/ を発音しない。
- (16) これは、まったく例外的なケースであり、このつづり字は、標準英語で「無声・軟口蓋・閉止音 (voiceless velar stop)」/k/ であったものが、tok・ピシンでは「有声・軟口蓋・閉止音 (voiced velar stop)」/g/ で発音されていることを暗示している。この様な実例を生み出す要因としては、「過剰矯正 (hypercorrection)」の結果、あるいは直前の「鼻音 (nasal)」/n/ の影響による「同化現象 (assimilation)」の結果などが考えられる。
- (17) また、標準英語の「無声・歯茎・閉止音 (voiceless alveolar stop)」/t/ や「歯擦音 (affricate)」/tʃ/

が、トク・ピシンでは「無声・歯茎・摩擦音 (voiceless alveolar fricative)」 /s/ となることがある。

・ /t/, /ʃ/ ⇒ /s/

kokonas (<coconut), haus piksa (<house picture=cinema), piksa (<picture=film (movie show), etc.

- (18) 外務省 (Ministry of Foreign Affairs of Japan) 「ジャマイカ (Jamaica)」 2008 年 10 月現在のホームページ (<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/jamaica/data.html>) 参照。
- (19) 外務省の資料によれば、ジャマイカ国民の民族構成は、アフリカ系黒人 91%、黒人系混血 6.2%、インド系 0.89%、その他 (中国系、白人等) 1.2% となっている。
- (20) ただし、バージン諸島は例外的に、アメリカ合衆国との関係を反映し、アメリカ英語の影響が強い。
- (21) 杉本豊久 (2008b) 「世界のビジン・クレオール英語－言語接触の諸相－」 矢野安剛・池田雅之編『英語世界のことばと文化』成文堂 268 頁。
- (22) 以下に紹介するジャマイカン・クレオールの言語的特徴は、杉本 (2008b : 268-274) の一部を再分類し、修正・加筆したものである。

◎ 本研究は成城大学特別研究助成金 (平成 19 年～21 年) 「最新の英語学総合研究」の助成を受けており、ここに記して謝意を表する。

【参考文献】

- Arends, Jacques, Pieter Muysken and Norval Smith, eds. 1995. *Pidgins and Creoles: An Introduction*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Bailey, R.W. and M.Gorlach, ed. 1982. *English as a World Language*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Chowning, A. 1977. *An Introduction to the Peoples and Cultures of Melanesia*. Manlo Park, California: Cummings.
- Davies, Diane. 2005. *Varieties of Modern English: An Introduction*. Harlow: Pearson Education Limited.
- Foley, William A. 1986. *The Papuan Languages of New Guinea*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gorlach, Manfred. 1991. *Englishes: Studies in Varieties of English 1984-1988. Varieties of English Around the World*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Hall, Robert A. 1954. *Hands Off Pidgin English!* Sydney: Pacific Publications PTY. Ltd.
- _____. 1966. *Pidgin and Creole Languages*. Ithaca: Cornell University Press.
- Hancock, Ian F. ed. 1985. *Diversity and Development in English-Related Creoles*. Ann Arbor: Karoma Publishers, Inc.
- Holm, John. 1989. *Pidgins and Creoles Vol. II Reference Survey*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Holm, John. 2000. *An Introduction to Pidgins and Creoles*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mosel, U. 1981. "Tolai and Tok Pisin: The Influence of the Substratum on Development of New Guinea Pidgin." *Pacific Linguistics* B73.
- Muhlhausler, P. 1977a. "The History of New Guinea Pidgin." *Pacific Linguistics* C40: 497-510.
- Muhlhausler, P. 1977b. "Sociolect in New Guinea Pidgin." *Pacific Linguistics* C40: 559-66.
- Muhlhausler, P. 1979. "Growth and Structure of the Lexicon of New Guinea Pidgin." *Pacific Linguistics*. C52. 199 ff. Canberra: Australian National University, Research School of Pacific Studies, Department of Linguistics.
- Muhlhausler, P. and T. Dutton. 1979. "Papuan Pidgin English and and Hiri Motu." In Wurn (ed) 1979. 209-223.
- Muhlhausler, P. 1982. "Tok Pisin in Papua New Guinea." In Bailey and Gorch (eds) 1982: 439-466.
- Smith, Larry E. and Michael L. Forman. 1997. *World Englishes 2000. Literary Studies East and West*. Honolulu: University of Hawai'i.
- Wells, J. C. 1982. *Accents of English*. vols I – III. Cambridge: CUP.
- Wurn, S.A. ed. 1979. *New Guinea and Neighboring Areas: Sociolinguistic Laboratory. Contributions to the Sociology of Language*. 24. The Hague: Mouton.
- 池田雅之、矢野安剛編 (2006) 『ヨーロッパ世界のことばと文化』成文堂。
- 河原俊昭、山本忠行編 (2004) 『多言語社会がやってきた』くろしお出版。
- 森本幸代 (2006) 『パトワ単語帖』Mighty Mules' Bookstore.
- 杉本豊久 (1985) 「ピジンとは何か、クレオールとは何か」『言語』Vol.14, No.11 大修館書店。
- _____. (1992) 「接触言語の変容 (II) —ジャマイカン・イングリッシュのライフサイクル—」『成城文藝』第138号。
- _____. (2001) 「爆発する英語：グローバル英語の時代」『英語教育』Vol.50, No.2 大修館書店。
- _____. (2008a) 「Tok Pisin のつづり字法・語彙・句表現 —その単純化と合理性—」『成城イングリッシュ モノグラフ』第40号 成城大学大学院文学研究科。
- _____. (2008b) 「世界のピジン・クレオール英語 —言語接触の諸相—」矢野安剛・池田雅之編『英語世界のことばと文化』成文堂 263-285頁。